

俵木浩太郎

Towaragi Kotaro

文明と野蠻の 衝突

新・文明論之概略



CHIKUMA SHINSHO

……こんにちもお激しい争いの起こるユダヤ教、キリスト教、イスラム教がともに肯定するモーセの出エジプトとその後の経緯が、福沢テゼのいう遊牧的粗暴性をもつものとうつることは避けがたい。(中略)その意味で二一世紀なお、文野闘争の課題は深刻なのである。

ちくま新書

322



ちくま新書

文明と野蛮の衝突

新・文明論の概略

俵木浩太郎

Tawara Hirota



ちくま新書

3 2 2

文明と野蛮の衝突

——新・文明論の源流——

二〇〇一年一月二〇日 第一刷発行

著 者 俵木浩太郎（たわらぎこうたろう）

発 行 者 菊池明郎

発 行 所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五二三 郵便番号一一一八七五五
振替〇〇一六〇八四一二三

装 幀 者 間村俊一

印刷・製本 株式会社精興社

ちくま新書の定価はカバーに表示しております。

ご注文・お問い合わせ、落丁本・乱丁本の交換は左記宛へ。

さいたま市桶引町二一六〇四 筑摩書房サービスセンター

郵便番号三三一八五〇七

電話〇四八六五一〇〇五三

© TAWARAGI Kotaro 2001 Printed in Japan

ISBN4-480-05922-9 C0220

文明と野蛮の衝突

——新・文明論之概略【目次】

はじめに

009

1 文明論と福沢テーズ

013

福沢テーズ／人類史的レベルでの「野蛮」

2 ゆらぐ「文明」概念

025

「文明」がゆらいだ二〇世紀／「文明」は「シヴィリゼイション」か？／「野」「バーバリアン」「サヴェジ」

3 西方の野蛮——文野闘争の起源

045

ギリシア・ゲルマン・ベドウィン／農耕と遊牧

4 「出エジプト」の遊牧民性と野蛮

057

モーセと『旧約聖書』の時代／『新約聖書』以後の野蛮性／現代に残る野蛮の母斑

5 なぜいま孔孟か

079

「仁恵の偽説」の発端／「狼狽」する西洋／「軍人勅諭」と「教育勅語」／権利と権義／孔子と孔孟

6 孔子という人

107

大家の孔子と教授の孔子／孔子一門と友愛／孔子についての確かなこと

7 孔子が夢見た周公 129

詩人・周公／革命家・周公

8 孔子の好学・武士の好学 143

孔子の学び／武士の好学／武士と洋学

9 楠正成の死の意味は？ 163

楠公権助論とその論理／管仲の評価をめぐって／正統儒教の「忠」の意味

10 「自由への日本の闘い」とその後の成り行き 181

W・ウィルソンの日本讃歌／「敗北」した「自由への闘い」

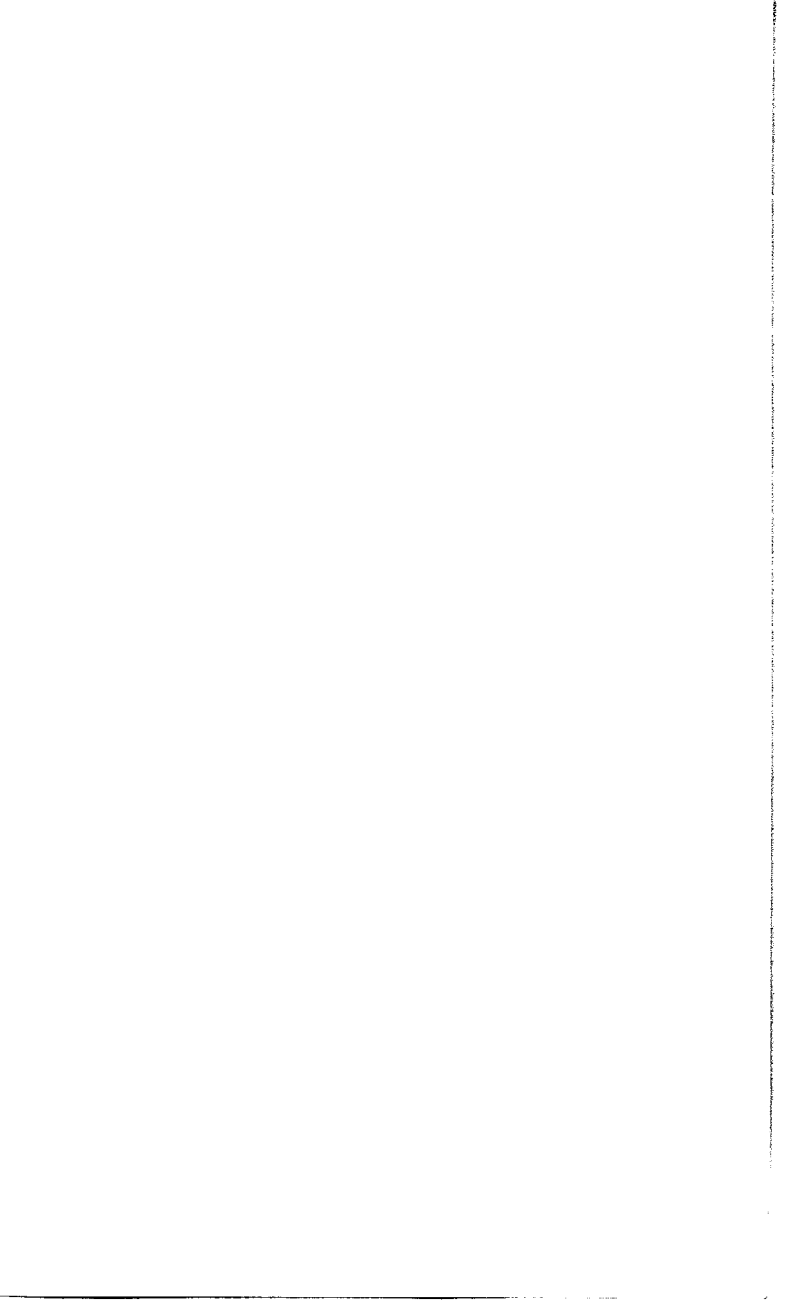
11 「自由」の歴史と孔孟思想 195

ギリシアの「自由」／明治の「自由」／孔孟思想と自由

12 文明論の展望——文野閭争を超えて 217

農の運命は？／自然と文明

おわりに 234





Cristofori faciem die quacumque tuens. omnino ecce
 zila nemp die morte mala non moriens. x^o anno: xi

聖クリストファー（クリストフ）

印刷術は野蛮から文明への人類の進歩途上での大画期となった。グーテンベルクの活版印刷術に先だってヨーロッパでは一五世紀に木版彩色版画が普及していた。このメディアの登場を利用して修道院が製作した護符に用いられたこの聖人には、その下部の文句「その顔を見た日には悪しき死を免がれよう」に示されるように、疫除けが期待された。以後二〇世紀ロマン・ロランは「どの国の人々であれ悩み、闘い、やがて勝利するであろう自由な魂たちにささぐ」べき大河小説『ジャン・クリストフ』において、この伝説の聖者にモティーフをとった。この伝説に人間の可能性への信頼を読みとることは、洋の東西を問わず可能である。

（本文二三三ページ参照）

はじめに

西暦二〇〇一年九月一日は、人類史的悲劇の日として、永く人びとの記憶にとどめられるであらう。

この日、アメリカ合衆国にあって、ニューヨークの世界貿易センタービルとワシントン近郊の国防総省に民間航空機をハイジャックしたテロリストが乗客ごと突入し、前者を倒壊せしめ、後者の一部を破壊し、前者にあって六〇〇〇名を上まわり、後者にあって約二〇〇名の犠牲者を出した、いわゆる「同時多発テロ」事件が発生したのであった。

状況証拠はこれをイスラム過激派の犯行とし、合衆国大統領はこれとの戦いを新たな「戦争」と呼んだ。さらにこれを「善と悪」の戦争とも言い、また「十字軍」とも呼んだ。そして事実アメリカ、イギリス両国の正規軍が最新兵器を用いてアフガニスタンを空爆しさらに地上軍を展開せしむるという事態へと発展した。彼等の認識からすれば、これは文明がテロリストの野蛮と戦うという図式になるが、他方で二一世紀に諸「文明」の衝突を予測した論者にとってはその予測の部分的実現ということになる。

と同時に二〇〇一年は、福沢諭吉没後百年でもある。この日本が生んだ文明史家は、在世時、

日本人の起源——定住農業——穩和

西洋人の起源——遊牧狩獵——粗暴

という図式を考え、他日の公表を期して、メモにとどめていた。彼の主著たる『文明論之概略』も、彼の認識のかぎりではやがて「真に文明の全大論と称す可きもの」が著述されるまでの「つなぎ」でしかなかったのである。すなわち、彼にあって人類はその野蛮状態から脱し、「人の精神発達」により実現さるべき理想状態が「文明」と考えられていたのであって、その「文明の全大論」にあっては前述の図式（これを「福沢テーゼ」と呼ぶことにするが）が根底に置かれるべきものと考えられる。本書では後述するがごとく、「文明」は一面ではシヴィライゼーションの訳語でありつつも、他面でシヴィライゼーションが含意しえない道德的要素を多分に有する概念であると考ええる。その上で人類は野蛮から文明への移行の過程にあるものと考え（その意味で「文明」は衝突しない）。その過程は、人類のうちから野蛮的要素を減じ、文明的要素を増す、いわば文野闘争とも評しうべきものである。

福沢はたとえば「物質的な文明は吾これを西洋に学びたるに相違なけれども、精神的の文明に至ては寧ろ外人に示す可きものあり」と自負していた。彼のこの自負を支えるものは彼の意味での武士道であり、武士道がその中核に孔子の思想をもつものであることは俵木浩太郎『新・士道論』（筑摩書房）に述べるところである。

本書においては、孔子の思想の歴史的基盤が高度な定住農耕文化を建設しえた古代中国、とりわけ、文王、武王、周公旦の周にあったことが重視され、加えて、孔子に私淑しその祖述に努めた孟子の「大丈夫」の論、「浩然の氣」の論に、西方の「自由・エレウテリオス、リバティ、フリーダム」に接続しうる要素を見出す。

「文明」概念の内実を定住農民的道德性をもって補填したとすれば、歴史的にはもとよりのこと、こんにちもなお激しい争いの起るユダヤ教、キリスト教、イスラム教がともに肯定するモーセの出エジプトとその後の経緯が、福沢テーゼのいう遊牧的粗暴性をもつものとうつることは避けがたい。これが西方で今後どう批判されてゆくことになるかはさだかではないが、批判されえぬとするならば西方はこれを野蛮性の母斑として引き継ぎつづけねばならない。その意味で二世紀なお、文野闘争の課題は深刻なのである。

では、階級闘争ならぬ文野闘争は、その止揚としていかなる展望をもちうるか。本書はそれを東西の人びとの自然観の深まりに求める。すでにプラトンにあっては孟子にあっては、自然破壊への危惧は明らかであった。人と自然との連続性の認識は東方、とりわけ日本においては著しい。他方西洋にあってはアッシジのフランシスコなどには明らかに見出しうるし、理論的にはその後多くの支持者をもったスピノザの説へのより真剣な考慮が求められることとなろう。

二〇世紀の日本は西方より帝国主義を学ぶとともに、その野蛮性をも学んだ。そのことについて

ての日本の反省がいかなるものであるべきかについては俵木浩太郎『平和の哲学』（ユネスコ選書古今書院）に述べられた。公式にはその反省とそれに基づく決意は「終戦の詔勅」、

堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス

に集中的に示されている。この「為万世開太平」という文句は古く朱子等の編んだ『近思錄』（一二世紀）にあらわれる。かえりみれば、日本の国体を定めた最古の文献たる聖徳太子『十七条憲法』は『論語』の「以和為貴」をもってはじまったのであった。「終戦の詔勅」はなお、「為万世開太平」の課題がこれまた『論語』をかりて「任重クシテ道遠キ」ものであることを認めている。この「任」は本書の論旨からは「文明」の「任」であることになる。福沢テーゼに言う定住が交情の深さをもたらすのであれば、人類は地球に「定住」して存在するものであることを認めざるをえないかぎり、「交情」を深めざるをえないのである。その方向に人類が「精神発達」すべきものであるとするならば、日本の人びとはきわめて豊かな歴史的知的遺産に恵まれているのである。その豊かさに一人でも多くの人がすこしでも早く気づいて欲しい、その願いのもとに本書は著わされた。

1 文明論と福沢テーゼ

↑福沢テーゼ

一九世紀後半、それまで二百数十年の泰平の眠りを覚まされ、欧米（ロマノフ朝ロシアを含む）の人びと及び文化と接触することになった日本人たちは、まずこれを侮蔑の態度で迎えました。彼等との外交交渉に直面しなければならなかった江戸の幕府が、次第に世界的規模での彼等の力を認めざるをえなくなり、これに融和的な態度を採りはじめるやいなや、京都の朝廷の威信をかき立て倒幕を企てんとした人びとの掲げた政治スローガンが「尊皇攘夷」すなわち、皇室の尊貴を認め神州日本の伝統を重んじ「夷」^{えい}・野蛮人をうちはらう、であったことはよく知られているでしょう。

古代中国にあって、この文字は伯夷という叔齊とならべ称される道德的潔癖性で有名な人物の名として用いられたりもしましたが、より一般的にはある種の野蛮人を指すことに用いられます。

た。ちなみに第二次世界大戦時の日本軍は焼夷弾という弾丸をもっていました。逆に、米軍がB 29から大量に投下するこの焼夷弾によって木造家屋が一般的であった東京、大阪をはじめとする日本の都市が攻撃され、大量の焼死者（三月一〇日の東京で九万と伝えられる）を出したことは余りにも悲しい皮肉と言わねばしょう。

中国の伝統的用語法では夷の反対は華であって、中央にある華が四方を野蛮人にとりかこまれているという認識が、以後、長くつづくその地の人びとのものとなり、現在の中華人民共和国となっているのです。

日本の幕末、「攘夷」を声高に叫んだ人びとの意識はこの中華思想を反映してのものでした。しかし、この人びととて、思想上のご本家たる清が一八四〇年から四二年の阿片戦争に敗北したことには脅威を感じたにちがいありません。侵略者たる大英帝国は一万四〇〇〇の兵を送りこみ、ついに南京条約により香港の割譲に成功したのです。この戦争で英軍の死傷者は五二〇人であったのにたいし、清国のそれは二万人に及んだと言われています。（教育社『戦争・事変 全戦争・クーデター・事変総覧』改訂新版による）

以後、「攘夷」のスローガンは倒幕の政略として用いられこそすれ、その実行の不可能は「勤王」の志士、幕府方の目にはこれは「浮浪」と写ったものでしたが、にも知られてゆきます。そして彼等が、宿願を達成し、いわゆる明治維新を断行するや、「神州」の尊貴からもあるいは幕

府の祖法という建前からいっても許しうる道理のない切支丹禁制の解除にふみ切りさえし、欧米の文物の導入に狂奔し、ついには鹿鳴館の出現に至ったのです。

こうした流れの中で福沢諭吉は欧米の文明の日本への紹介に多大な貢献をしましたが、一方で彼は欧米を冷めた目で見てもいたのです。

日本人の起原は農なり。農は処を定めて、動くこと少なし。人民久しく同居すれば其友情も亦厚し。一方に友情厚くして一方に武力の偏重あり。ナチュラルセレクシヨンの行はれずして人民の卑屈なる所以。即ち今の卑屈人民は早く当初に在りて消滅す可き筈の者なるを、仁恵の偽説のために、恰も一国の糟糠を万世に遺したるものなり。○西洋人の起原は獵者牧者にして処を定めず、初より殺伐奪掠の氣風有てナチュラルセレクシヨンの出来たるものなり。

これは福沢が私的に残したメモ『覚書』（岩波書店『福沢諭吉全集』再版第七巻所収 以下、全集からの引用はこの再版本による）の中の文で、明治一〇年頃のものと考えられますが、彼はこれにさらに次のように注意を書き添えています。

此論は深遠。青面書生には分らぬことなり。多くの実証を集めて後に人に示す可し。

「仁恵の偽説」によって卑屈な人民が生きのびて「一国」のかすを万世に遺したとはまことに思い切った表現ですが、彼の『学問のすゝめ』に見られる「一身独立して一国独立す」という強烈

な主張と裏腹な関係にある「卑屈」な日本人への激しい批判と同一の地平にあるものと言えるでしょう。彼はこの『覚書』の数ヶ条先にこの文の推敲案と見なされる次の文を遺しています。

日本人の起源は処を定たる農民なるが故に、交情深くして、仮令ひ貧弱の者と雖ども富強に対して憤怒の心少なし。西洋の人は其起原処を定めざる牧民又は獵者にして、加之各種族互に言語を異にし、之が「為」其交情薄くして残忍なり。故に貧富強弱相接すれば貧弱者常に憤怒の念深し。是即ち西人の粗暴なる所以なり。

刊行を意図した配慮からでしょうか、表現はかなり穏和になってはいますが次の論点は共通です。

日本人の起源——定住農業——穏和

西洋人の起源——遊牧狩獵——粗暴

本稿をすすめる便宜上、福沢のこの考えを福沢テーゼとよぶことに致します。このテーゼは彼自身、当時の一般の人びとの理解の範囲を超えていると認識していたようですが、これはおそらく、前述の「浮浪」のなかでも異色な浮浪、吉之助・西郷隆盛によっては理解されたと考えられます。生前の西郷は福沢の書は読んでおり、福沢は自著が西郷によって読まれたことを意義深いものと認めました。なによりも西南戦争の際、朝野こぞって西郷を「賊」視するなかで、福沢は西郷の弁明をする『丁丑公論』の筆を執っていたのです。おそらく福沢は目にすることはなか